

19世紀中国における薬用人参の市場について

童 徳琴

九州大学 人文科学府大学院東洋史学研究室

薬用人参は伝統医学の要薬として、中国では古来よりよく用いられている。明清時代から「温補」という医学思想が流行したことによって、全国的に薬用人参を始めとする「補薬」の消費ブームが起り、中国の市場では薬用人参に対する需要が急激に拡大した。一方、中国の主産地では、長年にわたる採集の結果、野生の薬用人参は減少してしまい絶滅の危機に瀕した。伝統的な医学思想では、野生の薬用人参のみに究極の効果があるとされていたために、薬用人参の需要はより一層増大し、野生種の薬用人参の供給不足という現象が加速的に進んだのである。また、当時の政府が、重要な財源確保政策の一つとして、民間での薬用人参の栽培を禁止していたことも、薬用人参の供給を不足させた一因であったと考えられる。

従って、中国では、19世紀にはいると、需要量と供給量の差が益々拡大し、薬用人参の需要と供給の関係は反比例的に展開した。それは、本物の朝鮮人参の値段は高騰し、市場には、偽物の人参商品が溢れ、海外からの人参商品が大量に輸入されるという状況を招いた。

清朝の初期の薬用人参の価格に関して見ると、中国の東北地域での産出量が多かったため、それほど高くはなかった。当時の医書によると、市場で薬用人参1斤（約600g）あたりの価格は銀10両ほどであった。時代が進むに連れて徐々に価格が上がり、康熙年間には、薬用人参1両（約60g）あたりの価格が銀10両ほどに上昇していた。乾隆時代になると、薬用人参の価格は急に高騰し、清代初期に比べると、百倍程の価格になっていた。薬用人参の消費ブームは衰えることなく続き、乾隆末期には、すでに普通の家庭では手に入らない程高価なものであった。

また、薬用人参の価格高騰のため、市場では多様な偽の人参商品が販売されていた。当時最も評判が良かったのは、東北地域産の「遼参」（植物学上の朝鮮人参）であったが、「遼参」の形に似た別種の生薬を「遼参」のように偽装して、薬用人参として販売することは普通に行われていた。また、旧来、薬用人参の根だけが薬種とされていたのだが、高相場のため薬用人参の葉や種までもが生薬として取り扱われるようになった。

また、この時期の市場には、自国産の薬用人参以外に、海外から輸入した薬用人参の商品が大量に出回っていた。輸入された薬用人参の商品は産地により、朝鮮産、日本産、アメリカ産という三種類が流通していた。そのうち、朝鮮産、日本産の薬用人参と中国産の薬用人参とは植物分類学上では同種で、いずれも *Panax ginseng* という植物である。アメリカ産人参の学名は *Panax quinquefolius* といい、朝鮮人参の形状と似通ってはいるが五加科の別種のものである。しかし、19世紀当時、中国の医書に両者の区別についての記述はあるものの、朝鮮人参に関する近代薬学の分析方法がまだなかったため、実際には、朝鮮人参の代用品としてアメリカ産人参が多用されていた。

ここで、明清時代中国で流行した「温補」という医学思想と清代政府の薬用人参に関する管理策とが相まって、薬用人参の消費市場の混乱を招いたと考えられる。その結果、国内のみならず、隣の朝鮮や日本、しかも遠隔の北米にも影響を及ぼし、各地域の薬用人参の栽培事業の発展を推進し、相手国の貿易政策にも影響を及ぼす要因になった。薬用人参はグローバル商品となって行ったのである。